

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録（2014.12）平成25年度:9-10.

看護診断力向上のための取り組み～出前カンファレンスを導入して～

渡邊 充広,谷口 亜紀子,植山 さゆり,塩谷 今日子,石倉 か
おり,伊藤 廣美

看護診断力向上のための取り組み ～出前カンファレンスを導入して～

旭川医科大学病院 渡邊 充広、谷口亜紀子、植山さゆり、塩谷今日子、石倉かおり、伊藤 廣美

【はじめに】

A 病院では 1991 年より看護診断を導入し、根拠に基づいて判断し、実践する看護師の能力育成に向け系統的な研修を実施している。しかし現状は「診断名を選択する」ことが「看護診断する」ことになり、看護ケアに有効活用されていない可能性がある。

臨床におけるカンファレンスは、看護問題を抽出し、解決方法を明確に展開することであり、看護診断するプロセスにはかならない。

そこで、看護で解決可能な介入と成果の検討を深めるために、院外で看護診断セミナーの指導者研修を終了した 5 名がファシリテーターとなり、院内各部署のカンファレンスに参加する取り組み（以下、出前カンファレンス）を導入した。今回参加者の評価により出前カンファレンスの効果を明らかにし、看護診断を活用した看護実践力向上につながるカンファレンスのあり方を検討したので報告する。

【研究目的】

看護診断力向上を目的とした出前カンファレンスについて、その効果と課題を明らかにする。

【用語の定義】

出前カンファレンス：看護診断から看護実践力向上を目的に選抜されたチームメンバーが各部署で行う事例カンファレンス

【研究方法】

1. 研究デザイン

無記名自記式質問紙による調査研究

2. 対象及び研究場所

1) 対象：出前カンファレンスに参加した看護師 112 名

2) 研究場所：A 病院病棟 13 部署

3. データ収集方法

1) 調査期間：2013 年 2 月

2) 調査方法

(1) 出前カンファレンスの実施

実施期間：2012 年 9 月～12 月

(2) 出前カンファレンス手順

- i. チームメンバー 1 名がファシリテーターとなる
- ii. 看護独自の視点からデータを集める
- iii. 実践できる具体的な介入を決定する
- iv. 看護介入・成果・看護診断を関連付ける
- v. 情報・介入・成果から看護診断を導く

(3) 質問紙内容：川島らが提案しているカンファレンス評価のポイント¹⁾を参考に看護で解決可能な介入と成果を検討できたかについて明らかにする質問紙を独自に作成。普段の部署カンファレンス（以下、部署カンファレンス）用 10 項目、出前カンファレンス後 12 項目で構成。質問紙は出前カンファレンス当日記載とし翌日以降回収した。

4. データ分析方法

属性による部署カンファレンスと出前カンファレンス後の差を、2 群の比較は Mann-Whitney の U 検定、3 群以上は Kruskal-Wallis 検定を用いた。さらに、出前カンファレンス実施前後の比較は、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。データの解析は、統計解析ソフト SPSS Ver.20.0J を用い、検定における有意水準は 5% とした。

【倫理的配慮】

研究の主旨と個人情報の保護を文書にて説明した。質問紙は無記名とし、回収をもって同意とした。尚、本研究は倫理委員会の承認を得た。

【結果】

調査は質問紙を参加者 112 名に配布し、部署カンファレンス 112 名、出前カンファレンス後 110 名から回収した。このうち有効回答が得られた 90 名（有効回答率約 80%）を分析した。

1. 参加者の背景

看護師経験年数（平均 9.03 年）では、1～3 年目が 36.7%、看護診断経験年数（平均 6.19 年）は、1～3 年目が 43.3% と共に最も多かった。看護診断セミナーの参加の有無は、受講なし（53.3%）が半数以上を占め、セミナー受講レベルでは上級コース修了（33.3%）が最も多かった。

2. 属性による比較

1) セミナー参加の有無での比較

出前カンファレンスでは全ての項目で有意差がなかった。部署カンファレンスでは「患者の望みや悩みの情報共有」「実践できる看護介入の検討」「看護介入・成果・診断を関連付けて検討」「看護診断する上で参考になるカンファレンス」「カンファレンスの満足度」($p < 0.01$)、「事例の共有」「情報・介入・成果から診断を導く」($p < 0.05$)の項目で看護診断セミナー受講なし群が有意に高かった。

2) セミナー受講レベルでの比較

出前カンファレンスでは全ての項目で有意差がなかったのに対し、部署カンファレンスでは「自分の意見を言える」という項目でセミナー上級修了者が有意に高かった ($p < 0.05$)。

3. 出前カンファレンス実施前後の比較

部署カンファレンスと出前カンファレンスの質問項目で対応する「事例の共有」「患者の望みや悩みの情報共有」「看護独自の視点での意見交換」「看護介入・成果・診断を関連付けて検討」「カンファレンスの満足度」「出前カンファレンスの継続」($p < 0.001$)、「実践できる看護介入の検討」「看護診断する上で参考になるカンファレンス」「カンファレンスで自分の意見を言える」($p < 0.01$)、「情報・介入・成果から看護診断を導く」($p < 0.05$)の10項目で比較した結果、出前カンファレンス後は全ての項目で有意に上昇がみられた。

4. 参加者の自由記載

「部署カンファレンスは診断の妥当性を検討していた」「他部署の人の多角的な意見が参考になった」などがあった。

【考察】

1. セミナー受講歴からみたカンファレンスの分析

出前カンファレンスでは、セミナー受講の有無と受講レベルで有意差がみられなかった。これは、出前カンファレンスが参加者全員の意見を引き出し、看護診断を導く過程である為、知識レベル等に関係なく看護診断する

際の参考になっていたことを示している。一方部署カンファレンスでは「自分の意見を言える」という項目でセミナー上級修了者が有意に高かった。これは、セミナー上級修了者以外からの患者情報が十分に引き出せていない可能性を示していた。また「診断の妥当性を検討していた」という自由記載から、偏った情報で看護診断の妥当性を検討する場となっていたと推察される。

2. 出前カンファレンス前後での比較

部署カンファレンスと出前カンファレンス後における質問項目の比較では、出前カンファレンス後に全ての質問項目で有意に上昇がみられた。これは、出前カンファレンスが患者を多角的視点から捉え、看護独自の視点から介入を見出し看護診断する過程を重視した手順で客観的にファシリテートを行った結果と考える。このことは出前カンファレンスの目的である「看護で解決可能な介入と成果についての検討」を強化、推進させたと考える。

伊藤らは、「学習会、事例検討会、カンファレンスにおいて正解・不正解ではなく、基盤となる知識をチーム全員で学習することに取り組んでいくことが今後の取り組みとして重要である」²⁾と述べている。有効なカンファレンスは根拠に基づいた判断、実践するための学習効果にもつながるものであり、教育効果も見込めると考える。

今後は、この取り組みを継続しながら各部署におけるファシリテーターの育成、教育システムの確立、看護診断力向上の評価が課題と考える。

【結論】

出前カンファレンスは、看護で解決可能な介入と成果についての検討を推進させた。

【引用文献】

- 1) 川島みどり, 杉野元子: 看護カンファレンス, 第3版, 医学書院: 2008.
- 2) 伊藤廣美, 三浦美佳, 他: 看護診断の活用を促す教育担当者のニーズ. 看護診断学会誌, 17(2):48-49, 2012.